

国土総合開発計画（全総）の歩み

項目 計画	決定時期 策定内閣 目標年次	背景	投資規模	主な事業
全総	1962年 池田勇人 1970年	所得倍増	「所得倍増計画」に 対応	拠点開発方式 新産業都市
新全総	1969年 佐藤栄作 1985年	高度経済成長	130兆円～170兆円	巨大工業基地 苫小牧東部 むつ小川原など
三全総	1977年 福田赳夫 1987年頃	安定成長	370兆円	定住圏構想 テクノポリス
四全総	1987年 中曽根康弘 2000年頃	東京一極集中	1000兆円	リゾート開発
五全総	1998年 橋本龍太郎 10～15年	高度情報化	投資総額示さず	多極型の国土形成

※五全総の正式名称は、「21世紀の国土のグランドデザイン」

1. 総投資額の大きさ

過去、5度にわたる全国総合開発計画の投資総額規模は1500兆円に達する。これだけでも、この計画がきわめて開発志向型のものであったことをうかがわせる。

2. 大型事業の投資計画という性格

全総による投資の主な対象は、産業基盤施設を中心にした大型事業であった。そこでは、地方の生活で必要とするはずの教育や文化、住環境といったソフト面に関する投資の必要性は視野に入らなかった。この意味で全総は、地域開発のための国土計画というより、国主導の大型事業に関する投資計画という性格が強かった。これはとりわけバブル期には、リゾート開発、それと結びついた土地あさに狂奔する下地になった。また、全総の経済主義的性格は、いずれの計画も目標年次までもたなかったことによくあらわれている。

3. 地域や自治の視点の弱さ

本来は、全総も地域開発を志向するはずの計画であった。しかし、その内容が国主導の大型事業に関する投資計画であっては、そこに地域や自治の視点が抜け落ちてしまうのもやむを得なかった。これが地方に自前の産業振興計画を長く持たせない遠因ともなった。